2007 年度 修了

社会的ひきこもりと向き合う父親の対処行動と心理過程

－生涯発達における停滞性の意味－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
井岡　潔美

本研究では，生涯発達における停滞性の意味という観点から，①社会的ひきこもりを家族にもつ父親が当該問題と向き合う中での対処行動と心理過程を明らかにし，②「ひきこもり」によってもたらされた生活の肯定的側面と否定的側面がどのように意味づけられているのかを検討することを目的とした。

1980 年代後半，特に 1990 年代以降，日本においては社会的ひきこもりが社会問題として取り上げられるようになり，社会学，精神医学等の領域を中心に研究が進められてきている。本人は文字通りひきこもった状態にあるがゆえに実態の把握も難しく，問題の長期化傾向とそれに伴う対人関係,就労,家族および本人の高齢化の問題等が懸念されている。従来の研究ではひきこもりの長期化要因の一つとして家族機能の不全・個人－家族－社会間のコミュニケーションの失調が考えられており，家族援助の重要性が示されているが，これまでの主な研究対象は母親であり，家族のもう一人の担い手である父親にも目を向ける必要がある。また，家族自身の成長を促す必要性がいわれるものの，子どもの成人以降までも視野に入れた親の発達という視点は乏しかった。それゆえ，社会的ひきこもりという長期スパンの問題を抱えながら，父親が我が家に起こったひきこもりという出来事をどのような事実としてうけとめ，ひきこもる本人とこの先どのように生きていくのかというプロセスを人格発達の視点から研究していくことは，今後の援助の方向性を探るうえでも役立つのではないかと思われる。

本研究では社会的ひきこもりと呼ばれる青年を家族にもつ父親 6 人を対象に半構造化面接を行い，家族のひきこもりという出来事をどのように意味づけるのかに焦点づけて質的に分析した。内，２名はひきこもり本人と初期の段階で別居のため分析から外したが，インタビューの中で得られた知見にはひきこもりの意味づけに関する興味深い内容のものがあり，一部考察では取り扱った。その結果，子どものひきこもり当初から現在に至るまでの父親の対処行動と心理過程は概ね①ショック・混乱　⇒②暗中模索　⇒③問題の共有⇒④自己の役割認識　の４つの時期にまとめられた。特に，暗中模索の時期と問題の共有の時期がその後の家族関係あるいは家庭と社会の関係を考える分岐点になることが示唆された。ひきこもりの意味づけについては，当初，時間の喪失，経済的負担，昇進の機会の喪失などひきこもりに対して否定的に捉えていたが，父親達は試行錯誤を繰り返しながら“父親となる”につれて，以前には意識されることのなかった養護性という資質を身につけ，支えあう人間関係の回復，次世代を育む役割の意識，将来に希望を見出す力などの肯定的意味づけをするようになっていった。父親達は，ひきこもり家族を見守る「待つ」行為を維持することによって，ひきこもりへの意味づけが肯定的に変化していくのではないかと思われる。